

六郷山寺院遺構確認調査報告書VI

吉水山靈龜寺・福積山慈恩寺・万福寺・龍下山成仏寺・夢社山行入寺



1998

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館

六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅵ

吉水山靈龜寺・稻積山慈恩寺・万福寺・龍下山成仏寺・參社山行入寺

1998

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館

序 文

国東半島一帯には古代から中世にかけて「六郷山」と総称される64ヶ寺の天台宗寺院が存在します。この六郷山寺院は、諸資料によれば宇佐神宮を中心に国東半島の西側に本山、中央山岳部に中山、東側に末山が分布する三山形式に組織されていたとされていますが、その成立や実態などについては様々な論議があることは周知のとおりです。しかし、これらの中には早くから廃寺になったものや無住になったもの、はてはその位置もわからなくなってしまった寺院さえ存在しています。このような状況下で、過疎化による六郷山寺院を支えてきた地元住民の激減とともに、近年の開発の波は、国東半島を覆い尽くすように進行し、六郷山寺院そのものが消滅の危機に瀕している現状にあります。

六郷山寺院の研究は、これまで文献側からのアプローチに偏っており、寺域やその規模、伽藍配置や各施設の遺構の状況等考古学的作業において把握すべき寺院の詳細は、ほとんど不明であるといった状態です。そのため当館では、平成4年度から3カ年にわたり18カ寺の基礎調査を行ってきました。しかし、六郷山寺院の全容を語るには未だ十分な資料を得るには至らず、平成7年度から新たに3カ年継続して六郷山寺院の基礎調査を行うこととなりました。今年度は、その最終年度に当たるわけですが、他宗に改宗された万福寺・慈恩寺や廃寺となり寺院名は残っているものの、場所を探すことさえ困難を極めた霊亀寺跡など、六郷山寺院として現在に伝えられている情報はますます少なくなっていくことは否めない有様です。それだけに、これまで続けてきた地道な作業の蓄積が六郷山寺院研究に必要な不可欠な作業であると確信しております。

最後になりましたが、本調査の主旨を御理解いただき、御協力を賜りました各寺院関係者および地元の方々、さらに地元教育委員会の皆様方に心から感謝し、御礼を申し上げます。

平成10年3月

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館長

首 藤 安 男

例 言

- 1、本書は、大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館が、平成7年度から平成9年度の3カ年にわたり国庫補助を受けて実施している六郷山寺院遺構確認調査の平成9年度の報告書である。
- 2、平成9年度は吉水山霊亀寺（宇佐市両戒）、稲積山慈恩寺（豊後高田市平野）、万福寺（国見町櫛海）、龍下山成仏寺（国東町成仏）、参社山行入寺（国東町横手）を調査対象とした。
- 3、調査にあたり各寺院の住職・総代をはじめ、地元教育委員会の協力を得た。また、各寺院の聞き取り調査ならびに周辺地域の踏査には以下の方々のご教示とご協力を得た。

霊亀寺…… 岡部保夫（大正12年生れ）、岡部芳行

慈恩寺…… 古庄金次

万福寺…… 金山寧（大正2年生れ）

成仏寺…… 高根美雄

行入寺…… 岩本佐々男（大正2年生れ）、岩本章

併せて記して謝意を表したい。

- 4、調査にあたり、遺構の実測・写真撮影は原田昭一・堀優子が実施し、図版の作成は原田・堀が宇留島秀子・大橋孝子の協力を得て行った。また、宇佐市両戒小字境界図の作成は櫻井成昭によるものである。
- 5、調査には以下の方々の参加を得た。

阿部輝代人・阿部ミツ子・石垣幸子・猪下貞子・今成幸子・宇留島秀子・大川信子・大橋孝子・川野猛・川野八重子・清原キヌ子・清原政澄・財前ヨリエ・福田教明・福丸照実・森重静江（敬称略、五十音順）

- 6、本書の執筆は以下のとおりである。

第1章 序説	原田昭一
第2章 六郷山寺院の調査概要	原田
第3章 六郷山寺院の調査	
I 吉水山霊亀寺（万福山古水寺）	原田
II 稲積山慈恩寺	原田・堀優子
III 万福寺	原田
IV 龍下山成仏寺	原田・堀
V 参社山行入寺	原田・堀
第4章 まとめ	原田

- 7、本書の編集は原田が行った。

目 次

第1章 序 説	1
第2章 六郷山寺院の調査	3
I 吉水山靈龜寺(万福山古水寺)	3
II 福積山慈恩寺	15
III 万福寺	25
IV 龍下山成仏寺	37
V 参社山行入寺	51
第3章 まとめ	61

図 版 目 次

第1図 六郷山寺院の主要分布図	2
第2図 吉水神社(吉水山靈龜寺跡)位置図	3
第3図 宇佐市西戒地区小字境界図	5
第4図 吉水神社周辺地形測量図	7-8
第5図 慈恩寺位置図	15
第6図 慈恩寺周辺地形測量図	17-18
第7図 万福寺位置図	25
第8図 万福寺国東塔実測図	27
第9図 万福寺周辺図	28
第10図 成仏寺周辺遺跡分布図	37
第11図 成仏寺阿弥陀堂周辺石塔実測図	39
第12図 成仏寺周辺宝篋印塔実測図	40
第13図 成仏寺周辺地形測量図	41-42
第14図 行入寺位置図	51
第15図 行入寺周辺地形測量図	53-54

写 真 図 版 目 次

写真1 吉水神社本殿	11
写真2 同 上	11
写真3 吉水神社本殿横地蔵・阿弥陀両面浮彫碑および石灯籠	11
写真4 吉水神社拝殿	12

写真5	吉水神社拝殿横石祠群	12
写真6	吉水神社参道石段	12
写真7	吉水神社参道	13
写真8	吉水神社参道入口石鳥居	13
写真9	吉水神社第1石塔群(その1)	13
写真10	吉水神社第1石塔群(その2)	14
写真11	吉水神社第2石塔群	14
写真12	吉水神社第3石塔群	14
写真13	慈恩寺より田染盆地を望む	21
写真14	慈恩寺近景(南より)	21
写真15	慈恩寺観音堂	21
写真16	慈恩寺六所櫓現	22
写真17	慈恩寺稲積社	22
写真18	慈恩寺歴代住職墓地	22
写真19	慈恩寺歴代住職墓地内中世石塔群	23
写真20	慈恩寺歴代住職墓地内宝篋印塔	23
写真21	慈恩寺石塔群	23
写真22	慈恩寺石塔群内笠塔婆・無縫塔	24
写真23	稲積不動堂(銅山磨崖仏)	24
写真24	同上	24
写真25	万福寺近景(東から)	31
写真26	万福寺本堂	31
写真27	万福寺観音堂	31
写真28	万福寺石塔群	32
写真29	同上	32
写真30	万福寺歴代住職墓地	32
写真31	万福寺1号国東塔	33
写真32	万福寺2号国東塔	33
写真33	万福寺寺族墓地	34
写真34	万福寺寺族墓地配石墓(その1)	34
写真35	万福寺寺族墓地配石墓(その2)	34
写真36	万福寺寺族墓地配石墓(その3)	35
写真37	薬師如来石塔	35
写真38	字大平所在薬師如来石塔	35
写真39	成仏寺遠景(南から)	45

写真40	成仏寺近景	45
写真41	成仏寺歴代住職墓地	45
写真42	成仏寺歴代住職墓地内順慶法印墓	46
写真43	成仏寺歴代住職墓地内板碑	46
写真44	成仏寺奥の院周辺近景	47
写真45	成仏寺奥の院（阿弥陀堂）	47
写真46	成仏寺奥の院横石塔群	47
写真47	成仏寺奥の院横宝篋印塔	48
写真48	成仏寺奥の院横国東塔	48
写真49	成仏寺内畑観音堂	49
写真50	成仏寺内畑観音堂横石塔群	49
写真51	虚空蔵寺跡	49
写真52	山神社宝篋印塔	50
写真53	山神社石幢	50
写真54	行入寺・千の岩遠景	57
写真55	行入寺近景	57
写真56	千の岩遠景	57
写真57	行入寺大師堂跡	58
写真58	行入寺妙見宮	58
写真59	行入寺不動堂跡（その1）	58
写真60	行入寺不動堂跡（その2）	59
写真61	行入寺歴代住職墓地（その1）	59
写真62	行入寺歴代住職墓地（その2）	59
写真63	行入寺法泉院跡集石遺構（その1）	60
写真64	行入寺法泉院跡集石遺構（その2）	60
写真65	行入寺法泉院跡石塔群	60

表 目 次

第1表	吉水山靈亀寺関係文献一覧表	9
第2表	稻積山慈恩寺関係文献一覧表	19
第3表	万福寺関係文献一覧表	29
第4表	龍下山成仏寺関係文献一覧表	44
第5表	参社山行入寺関係文献一覧表	56

第1章 序 説

(1) 調査に至る経過

関東半島には、古代から中世にかけて繁栄した「六郷山」と総称される60数ヶ寺の天台宗寺院が所在する。しかし、早くから廃寺になったものや無住の寺も少なくなく、なかには位置さえ分からなくなったものも存在する。現在まで存続している寺院にしても、古代や中世の状況は不明な点が多いが、近年の開発の波はこれらの寺院の周辺にまで及びつつあり、過疎化の進行とともに六郷山寺院は大きな危機にさらされるようになった。

六郷山寺院については、これまで主として文献側からの研究に偏っていたため、考古学的調査がほとんど行われておらず、寺域や寺の規模、伽藍配置、遺構の状況といった寺院の詳細についても不明な点が多かった。そこで、六郷山寺院の概略的な全体像を把握するため、現状の記録と併せて、寺院遺構の存否、遺存状況、寺域などについて確認を行い、可能な限り図化して基本資料を作成し、六郷山寺院の研究に資するとともに将来の開発に対処する事を目的とした。

当館では平成4年から3か年に及び六郷山寺院の遺構確認調査を行ってきたが、六郷山寺院総数のわずかししか果たしていないのが現状であり、六郷山寺院に関する考古学的基礎資料はまだまだ不十分と言わざるをえない。そのため、平成7年から3か年にわたり、さらに六郷山寺院の遺構確認調査を継続し、資料の蓄積を試みるものであり、最終年度となる今年度は古水山靈龜寺、稲積山慈恩寺、万福寺、龍下山成仏寺、叡社山行人寺をその対象地とした。

(2) 調査組織

1. 調査責任者

大分県教育委員会教育長 田中恒治

2. 調査委員及び調査員の構成

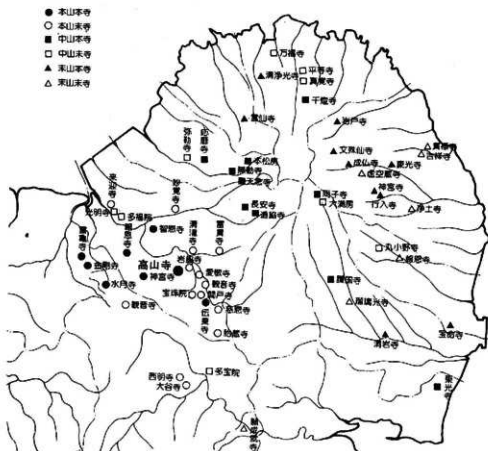
調査委員

小田富士雄	福岡大学教授
後藤宗俊	別府大学教授
岡 秀夫	東海大学教授
千々和到	国学院大学教授
飯沼賢司	別府大学教授

調査員

首藤安男	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館館長	
口野富雄	同	副館長
甲斐忠彦	同	学芸課長
真野和夫	同	調査課長

渡辺文雄	同	主幹研究員
山田拓伸	同	主幹研究員
原田昭一	同	主任研究員
菅野剛宏	同	研究員
櫻井成昭	同	研究員
堀 優子	同	囑託
渋谷忠章	大分県教育庁文化課主幹兼文化財管理係長	
高橋 徹	同	埋蔵文化財第一係長
金田信子	国東町教育委員会文化財係長	
長尾和利	国見町教育委員会生涯学習課係長	
佐藤良二郎	宇佐市教育委員会文化課主査	
河野典之	豊後高田市教育委員会社会教育課技師	
調査事務		
岡本義博	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館総務課長	



第1図 六郷山寺院の主要分布図（『仁安三年六郷二十八山本寺目録』による）

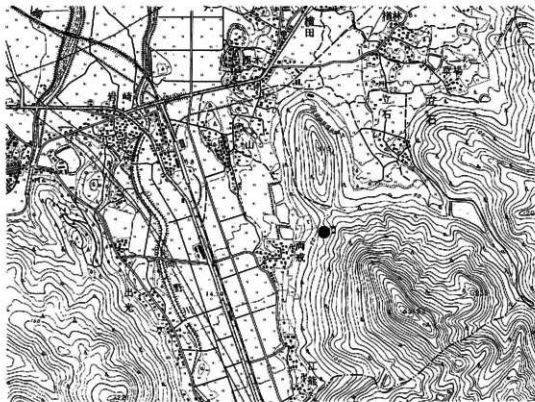
第2章 六郷山寺院の調査

I 吉水山靈龜寺（万福山吉水寺）

吉水山靈龜寺（万福山吉水寺）の故地と伝えられる古水神社は、宇佐市大字両戒の両戒山西麓に位置する。丘陵斜面をのぼる長い石段の最上部に社殿と拜殿および神楽殿があり、この周辺を中心に伽藍が想定できる。

現在、吉水山靈龜寺（万福山吉水寺）の寺基を継承するとされる古水山福昌寺の『寺院明細歴』には、靈龜2年（716）、良庵元覚和尚が法相宗の寺として開き、暦応元年（1338）、円龜正覚和尚が臨濟宗に転宗することにより中興した後、至徳元年（1384）に象融淨和尚が曹洞宗に改宗して現在に至ることが記されている。しかし、安貞2年（1228）の文書以来、暦応元年に至るまで国東半島の天台宗寺院のまとまりである六郷山の1カ寺として把握されており、『寺院明細歴』の記載とは異なり、天台宗時代が存在したことが分かる。

大正4年に刊行された『馬城尋常高等小学校郷土史誌』には、以下のように記載されている。



第2図 吉水神社（靈龜寺跡）位置図（縮尺1：25,000）

傳説又ハ口碑

大学戒函

後六坊前六坊

昔吉水神社の社僧（天台行者）として山の後に六坊、前に六坊ありて吉水神社を守護し居たり、而して吉水神社の祭日は旧曆二月十五日にして英彦山神社の祭日と同日なりしなり、されば英彦山神社祭日は東豊後口の参拝者を吉水神社祭日の為め食ひ留めらるるによりて、之れが為め英彦山僧坊の怒を買ひ、遂に前後十二坊を焼打せられ、烏有に帰せしめしものなりと言ひ傳ふ、

前六坊とは

本光坊（字本光）

妙光院（同字）

利生寺（池の上）

池の坊（宮の下）

良寺（寅地）

靈龜寺（字） 現に福昌寺の前身にして

池の坊の如きは其の庭園の泉水の跡、今に其佛を留め、其他の寺家数は今は大概畑となりて佛を存ぜざれど、間に土中より仏具僧具等を掘り出すことあり、然して村人多くは字名を呼ばずして、寺号又は単に寺家數と呼ぶ事多し、

後六坊は今其の名称を記憶するものなけれども、山中に寺家數と呼はるる箇所ありて、之れ亦庭園の泉水跡に其の佛を認るる所あり

近年迄封戸村大字立石に放光坊と称する寺院ありてしが、之れが後六坊の焼かれし際、村に下りて庵を構へ、以て今日に至りしものならんかと言はるるもあり

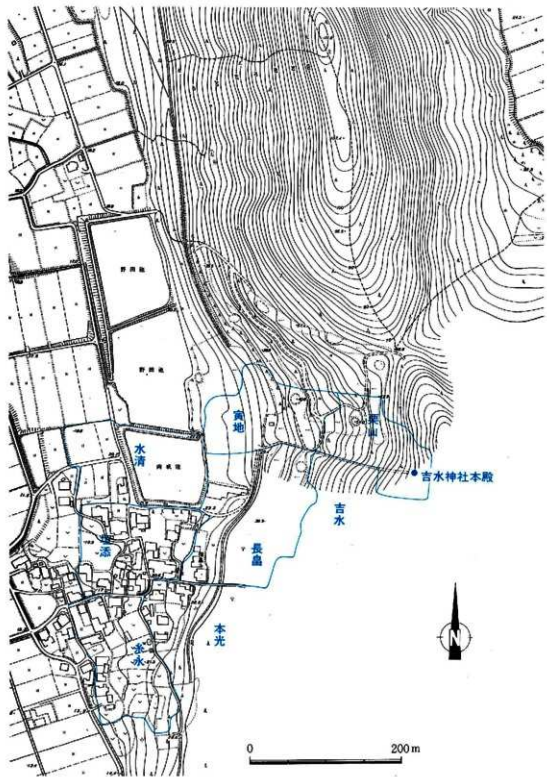
これからも『太宰管内志』の記載ともあわせて、靈龜寺廃絶後も永く吉水神社周辺が靈龜寺の故地であると伝えられていたことがわかる。

吉水神社本殿

石段最奥部の標高87mの地点に約150㎡の平坦地がみられる。ここに覆屋に覆われた吉水神社の社殿とその前面に拝殿（昭和32年銘の棟札あり）が建てられている。社殿の南側には、長さ180cmと150cmの石列がみられ、現在の社殿が存在する以前に別の建造物があり、それに関連するものかもしれない。

社殿南奥には、石列に囲まれた一角がみられ、その前面に戦国期のものと考えられる地藏・阿弥陀両面浮彫碑がみられる。また社殿の北手前と、社殿南奥の石列に囲まれた一角の前面には石灯笼がみられ、いずれも宝永2年（1705）の紀年銘がみられる。なお、社殿北側には第2次大戦後まで小型の木造社殿が残っており、「ほとけさま」を祀っていたが、社殿が倒壊したため御神体を現社殿に移したと地元では伝えられている。

社殿へ向かう石段登り口両端に石灯笼があり、それぞれ天保14年（1843）・弘化4年（1847）



第3图 宇佐市両戒地区小字境界图

の紀年銘を持つ。また、拝殿奥の壇上に石鳥居の扁額が置かれており、扁額には「三王権現」の銘がみられる。吉水神社の社伝では、かつて三王権現と称していたが、明治時代の神仏分離により吉水神社と名称を改めたと伝えられている。

吉水神社拝殿

社殿から石段を降りると約250㎡の平坦地が見られ、ここに神楽殿が建てられている。神楽殿奥の壇上には石祠が4基と自然石の立石が4基みられる。石祠には、寛政12年(1800)・文化6年(1809)・明治19年(1886)の紀年銘のものが3基あり、明治19年のものは金毘羅社と伝えられている。なお、神楽殿前には石鳥居の基礎のみ残されており、拝殿奥の壇上に残る石鳥居の「三王権現」扁額はこの石鳥居のものかもしれない。なお、この石鳥居跡の横に自然石立石がみられるが、かつては銘文が読みとれ、庚申塔であり、第1平坦面に立てられていたものをここに移したと伝えられている。

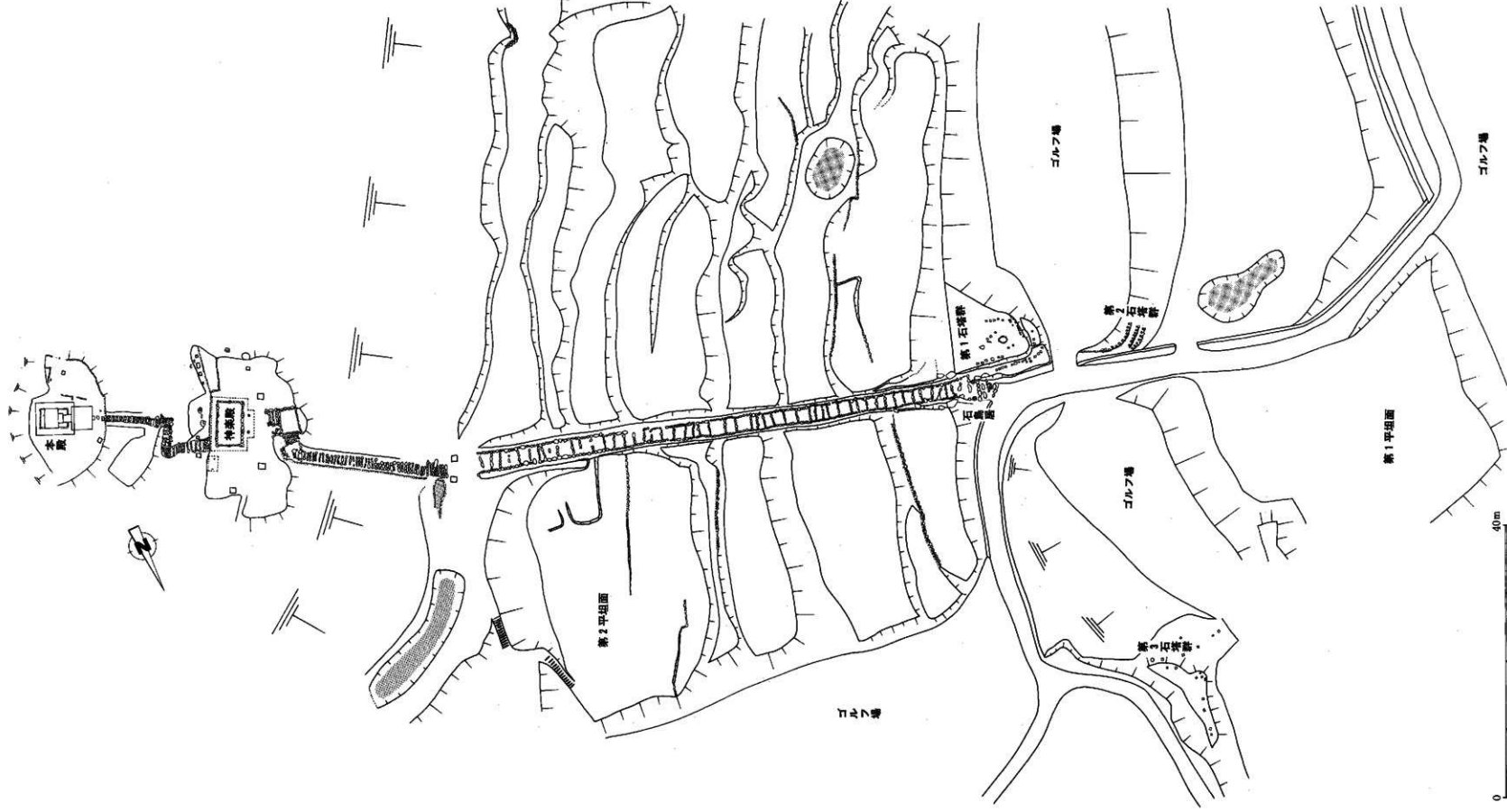
吉水神社参道横平坦地群

吉水神社の現参道入り口に建つ石鳥居から75mの参道の上り坂が続き、その両側に平坦面が何段も続く。その最上段の北側を第2平坦面とした。現在、第2平坦面は竹林・杉林・雑木林であるが、約850㎡と、最も広大な平坦地である。地元の伝承によれば、本来、吉水寺(霊亀寺)は現在、吉水神社社殿が位置する場所にあったが、後山金剛寺から山王権現を吉水神社社殿の位置に下ろした際に、吉水寺(霊亀寺)をこの平坦地に移したとされている。また、この平坦地の参道を挟み反対側の平坦地にも寺院建造物が存在したと伝えられている。

第1平坦面は、参道石段入口の石鳥居から約30m降りた北側にある。現在、周辺のゴルフ場開発に伴い埋土され、本来の地形を伝えないが、ここに数基の庚申塔をはじめとした石塔が立てられていたと伝えられる。1基は現在、吉水神社神楽殿前に移されているが、他は埋土により埋められている。この一角のみ現在、社地の一部とされており、吉水神社と関連深い土地であることがわかる。

吉水神社周辺石塔群

吉水神社参道入り口南側をはじめ、3箇所に五輪塔を主体とした中世後半の石塔群が集中する場所がみられる。これらは本来、原位置および周辺から集められたものではなく、東国東郡安枝町から昭和期に持ち込まれたと伝えられている。



第4図 菅水神社周辺地形測量図

写真1
吉水神社本殿



写真2
同 上



写真3
吉水神社本殿横地蔵・
阿弥陀両面浮彫碑
および石灯籠





写真4
吉水神社拝殿



写真5
吉水神社拝殿横石祠群



写真6
吉水神社参道石段

写真7
吉水神社参道



写真8
吉水神社参道入口石鳥居



写真9
吉水神社第1石塔群(その1)





写真10
吉水神社第1石塔群
(その2)



写真11
吉水神社第2石塔群



写真12
吉水神社第3石塔群

II 稲積山慈恩寺

中世、本山分末寺の1カ寺であった稲積山慈恩寺は、豊後高田市大字平野字観音堂に所在する。近世初頭、真木城主、松平主殿の弟である古庄正勝が臨濟宗寺院として再興したと伝えられるが、六郷山時代の遺構・遺物もわずかであるが残されている。伽藍は、上野盆地南側の桂川を挟んだ比高差約30mの高台平坦地を利用して営まれており、盆地を見下ろすには、絶好の位置にある。

元禄2年(1689)に描かれたものを天保7年(1836)に描き写したものとされる『豊後国田染組観音堂村絵図』は、観音堂村周辺の近世初頭の景観をよくあらわしており、現在に残されていない小堂が存在するものの、基本的な集落景観はほぼ同じで大いに参考になる。以下、現在に残る遺構について詳述したい。

本堂・庫裡・観音堂

横約60m、奥行き約40mのコンパクトな空間の中央に南面して本堂が建立されている。本堂は桁行8間・梁行4間の瓦葺きで、庫裡と一体になっており、本尊として釈迦如来を安置している。なお、本堂内には文化13年(1816)銘の半鐘がみられる。

また、本堂の手前西側に堂宇2間四方の観音堂が東面して建つが、現在の建物は昭和50年代に修理されたといわれている。本来、観音堂は、原位置より東南約100mの位置に存在していたものを慈恩寺境内に移したと伝えられているが、その時代は不詳である。『豊後国田染組観音堂村絵図』では、伝承地にあたる場所に堂舎の記載が見られず、近世初頭にはすでに移動させられていたものとなる。近世には「観音堂邑」の地名がみられることから、中世段階では、この一帯に



第5図 慈恩寺位置図(縮尺1:25,000)

1. 慈恩寺 2. 稲積不動堂(鍋山磨崖仏)

においてシンボリックな建物であったことがうかがえる。

現在、観音堂正面中央須弥壇に本尊木造観音菩薩像が安置されており、その堂内左側須弥壇に阿弥陀・観音・弘法大師・地藏2体の石像が、右側須弥壇に3体の木彫仏が安置されている。右側須弥壇上に木札がみられ、「文化十四年 越前 奉寄進 丑三月吉日」と墨書されている。その他に6体の石造仏と庚申塔の残欠が置かれている。また、罫口には「寶永五戊子歲閏正月十八日 奉寄進罫口 古庄喜左衛門 同惣兵衛」の銘がみられた。

六所権現・稲積社

本堂西の裏手に土塼に囲まれたスペースがあり、稲積社よばれる小さな石祠が南面して建つ。石祠には「安政六年未正月吉日 組頭古庄七左エ門 當村氏子中」の銘がみられた。石祠の西側には石垣で囲った高さ80cm、横3m、奥行1m50cmほどの墓壇があり、そのなかに高さ約0.6～1mの自然石立石が6基みられるが、これを六所権現としている。

歴代住職墓地

境内地の手前西側には、歴代住職墓地が営まれている。無縫塔を中心に60基をこえる墓碑がみられ、最奥部には戦国時代のものと思われる五輪塔・一石五輪塔・宝塔の残欠が集積されている。また、なかには戦国末～近世初頭の宝篋印塔も2基みられ、戦国末期から連続と続く墓地であることがわかる。

石塔群

境内地の西側に8基の石塔が集積されている。無縫塔1基、石殿1基、板碑1基、自然石塔婆1基のほかに以下の銘が刻まれた石塔が2基みられる。

(1号石塔) 延享三(1746)丙寅天九月念八日造立

醍醐妙典一千部讀誦供養之塔

施主大円和尚

(2号石塔) 貞亨元(1684)甲子三月日

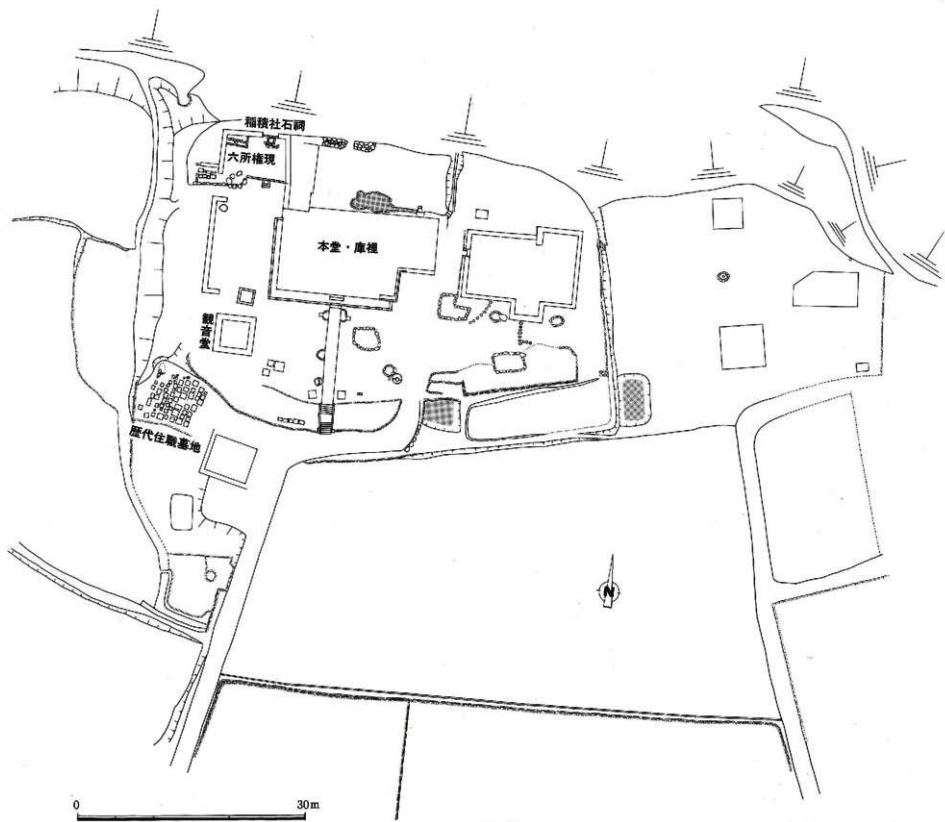
金剛般若一字一石塔□

居士自得是伴敬書

石殿には、正面に3体、左右に1体ずつの地藏を彫るものや、正面裏面に2体ずつの地藏を彫るものがみられる。また板碑は正面に形態不明の尊像が2体彫られている。これらの石造物から戦国時代～近世前半の供養塔を中心にした石塔群であることがわかる。

稲積不動堂(鍋山磨崖仏)

一般に「鍋山磨崖仏」といわれる稲積不動堂は、近年、木造の堂舎が再建された。上野盆地最奥部から東側に桂川を上り、兩岸に断崖がせり出す北側の崖面中腹に鍋山磨崖仏がみられる。鍋山磨崖仏は2.3mの不動明王立像と杓羯羅童子立像・制多迦童子立像(いずれも1.2m)で、鎌倉初期の製作とみられている。



第6図 慈恩寺周辺地形測量図

第2表 稻積山慈恩寺関係文献一覧

年 号	出 典	記 載 事 項	備 考
安貞2年 (1228)	六郷満山新徳巻数目録	木山分 一不動ノ石屋 ²⁾	太宰管内志
安貞2年 (1228)	六郷山諸勤行并諸堂役 祭等目録	木山分 一不動石屋 木尊不動 五丈石身 深山眞明 如来 ³⁾	長安寺文書
嘉元2年 (1304)	六郷原山例講谷役配分 注文	七月ハ 稻積	太宰管内志
建武4年 (1337)	六郷山木中末寺次第並 四至等注文案	木山末寺 稻積岩屋	永私文書
仁安3年 (1168) 泰祖し世世の作	仁安三年六郷二十八山 本寺目録	序分木山分末寺 稻積山慈恩寺	太宰管内志
文化元年 ~天保12年 (1804~1841)	太宰管内志	「六郷山の縁起」といふ物に稻積ノ不動とあり不動ノ 石屋も慈恩寺も頁書に田舎とあり	
?	六郷山定頼院主目録	稻積山観世音寺院主傳乗寺ノ徒也	太宰管内志



写真13
慈恩寺より田染盆地を
望む



写真14
慈恩寺近景（南より）



写真15
慈恩寺観音堂



写真16
慈恩寺六所権現



写真17
慈恩寺稲積社



写真18
慈恩寺歴代住職墓地

写真19
慈恩寺歴代住職墓地内
中世石塔群



写真20
慈恩寺歴代住職墓地内
宝篋印塔



写真21
慈恩寺石塔群





写真22
慈恩寺石塔群内
笠塔婆・無縫塔



写真23
稻積不動堂
(鍋山磨崖仏)

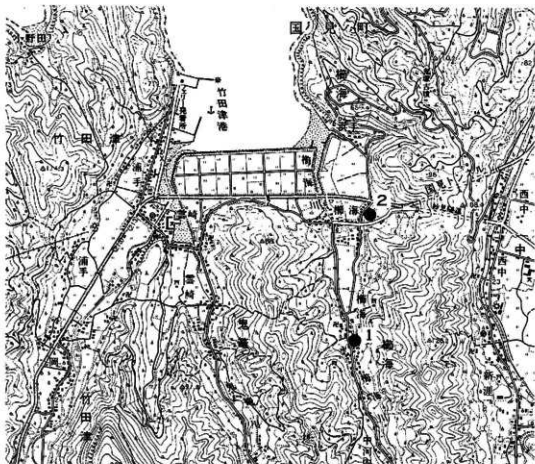


写真24
同上

Ⅲ 万福寺

万福寺は、東国東郡国見町櫛海に位置し、その本尊に11世紀のものとされる県指定有形文化財の木造薬師如来坐像を安置することで名高い。万福寺は現在、曹洞宗の寺院であるが、仁聞菩薩開基の伝承をもち、明治23年の寺院明細帳によれば、養老2年(718)、海中より現れた薬師如来を丸隈に安置した後、万福寺に移したとされている。その後近世のものとされる「仁安三年六郷二十八山本寺目録」に中山分末寺として「吉水山万福寺」とあり、また、「太宰管内志」の「六郷山定願院主目録」には、「加礼川古水山万福寺院主弥山徒巖然寺」とみられ、これについて「太宰管内志」には、現在、宇佐市両戒にある福昌寺とは異なる寺院であることを指摘している。しかし、中世の六郷山寺院を網羅する「六郷山諸動行並諸堂役祭等目録寫」文書には「万福寺」としての記載はみられない。

万福寺は、国東半島北部の国見町に流れる櫛海川流域の谷部中央に、川に面して寺域をもつ。集落の宅地内に寺域をもつコンパクトな空間であり、墓地などは寺域から離れた山中に営なまれ



第7図 万福寺位置図(縮尺1:25,000)

1. 万福寺 2. 薬師如来石塔

ている。

本堂周辺境内地

山門を入り、境内地には中央に本堂が、その南東側に観音堂がみられ、本堂北側に庫裏、その北側には倉庫が建てられている。

本堂は江戸時代末の建立と伝えられ、観音堂の建立時期は明確には明らかでない。しかし、明治23年の寺院明細簿には、観音堂の記載は見られず、釈迦堂の記載が見られる。釈迦堂は慶長7年(1602)創建であり、明治10年(1877)再建と記されているが、釈迦堂について、その故地、その他の伝承は全く伝えられていない。なお、観音堂裏の石塁上から本堂方向に向かい、戦国時代のもと考えられる約20基の五輪塔・一石五輪塔・宝塔・板碑などが置かれている。これらについて、他所から移されたとされるが、その旧在地は伝えられていない。

山門の前には石造仁王像がみられ、阿形の基礎に「文化七(1810)庚午紀 當村 宅蔵」、吽形の基礎に「十二月吉祥日 戎村 源左衛門」の銘文がみられる。また、山門横には手水鉢が置かれており、これにも享和2年(1802)の紀年銘がみられる。

国東塔

本堂南側及び庫裏裏にはそれぞれ1基ずつの国東塔がみられ、他所から移されたものかどうかは明らかでないが、前者を1号国東塔、後者を2号国東塔として報告する。

1号国東塔は総高263cmを測る完存の国東塔である。基礎の造りは荒く各辺に膨らみを呈する。台座請花・反花は彫りが浅く稚拙であり、意匠のバランスも極めて不均衡である。円形の納経孔がみられる塔身は丸いプロポーションをもち、首をもつが、笠下部には首を嵌め込むほどは見られない。笠は照屋根を呈し、各コーナー下部を削り落として軒口を造作しているのみで、造りは粗く、軒口を緩やかなU字形に見せている。露盤の彫りも浅く、相輪台座の連弁は塔身下部の台座と類似し、同一個体であることがわかり、また、その断面形は隅丸方形を呈する。本例各部位の諸特徴から室町時代に帰属することが想定できる。

2号国東塔は相輪の宝珠・請花を欠損するのみで残存高195cmを測る。最下段の基礎は方柱状の石材を井桁状に組み、その上の2段の基礎石は調整が粗く、格狭間もみられない。台座は反花のみであり、複弁八葉の蓮弁は彫りが浅いが、秀麗である。塔身は中位よりやや上方に最大径をもつ円筒形に近く、首も比較的長い。なお、首には円形の納経孔が穿たれている。笠は照屋根であり、中央部で膨らむ軒口は薄く、軒端部でやや上方に反る。露盤には2区画の格狭間がみられ、塔身台座の請花・反花は摩滅が著しく、弁数などは不明である。本例各部位の諸特徴から南北朝時代後半に帰属することが想定できる。

墓地・寺族墓地

万福寺墓地は万福寺背後の丘陵を利用して2個所に営まれており、元文元年(1736)銘をもつ3世以降の歴代住職の墓地は11基の無縫塔からなる。

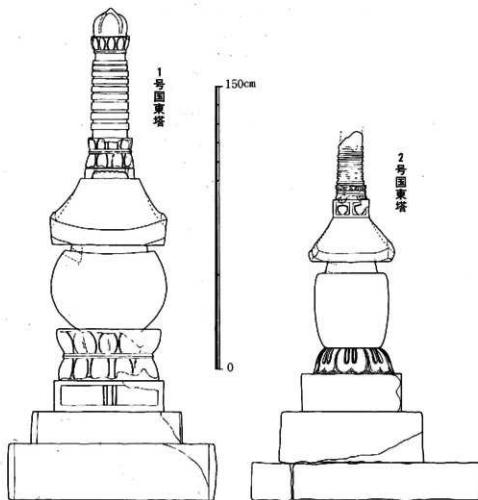
一方、「寺族墓地」として万福寺により管理されている墓地がみられる。ここには「當寺中興天山儀叶禪師 享保五年(1720)十一月廿五日」の銘をもつ板碑型墓碑と「掃真栄岩寿盛信女

吳位 正徳元□卯天（1711）三月廿九日」の銘をもつ笠塔婆型墓碑がみられるほか、無銘の無縫塔と「宗因」銘をもつ自然石塔婆がみられる。これらの石塔群から万福寺が寺壇制成立後、近世的展開をとげる初期の墓地であることがわかる。ここに五輪塔・一石五輪塔など50基の戦国時代の石塔がみられ、うち約20基には配石葦が伴う。

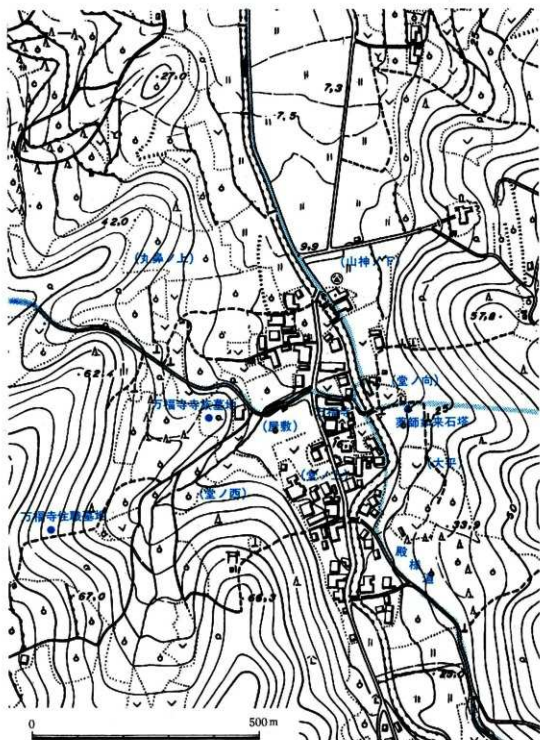
薬師如来石碑

明治23年の寺院明細帳には、養老2年（718）、海中より現れた薬師如来を丸隈に安置した後、万福寺に移したとされている。現在、その故地とされる2箇所の場所に薬師如来の石碑が建てられている。

1箇所は、最初に薬師如来を安置したとする伝承をもつ大字榑海の妙光寺裏山に「薬師如来 敬白」銘の総高130cmの方柱石塔婆がみられる。他の1箇所は、万福寺の榑海川を挟み、反対側に位置する「薬師遺跡 伝助建立」銘をもつ総高160cmの方柱石塔婆である。ここでは、万福寺に



第8図 万福寺国東塔実測図



第9図 万福寺周辺図（トーンの部分は古道、カッコ内は字名）

第3表 万福寺関係文献一覧

年 号	出 典	記 載 事 項	備 考
建武4年 (1337)	六郷山本中末寺次第并 回至等注文案	中山末寺 一葉師堂 料田畠四至以下 院主證 文明白色	永弘文書
?	六郷山定額院主目録	加藤川吉水山万福寺院主彌山ノ徒亡所嚴然今ま た吉水寺院主護國院徒呂十二房也 彌山 等語 等語 等語 等語 えたり比ノ寺事いまだ考へず <small>建武末に在りて山内院寺の御書 (カクノ) 所にありて今山内院の御書なるは建武末の御書なり又山内院の御書なるは建武末の御書なり 建武末に在りて山内院の御書なるは建武末の御書なり</small>	
?	六郷山定額院主目録	補陀落山千燈寺、嶺松院ノ徒呂三十八箇所 権 現 観音 大講堂 高野 五岩屋 下礎下拂 等語 來死海薬師 伊美ノ平等寺 伊美ノ萬徳寺 神 宮寺也	太宰管内志
仁安3年 (1337) 泰祖し後世の作	仁安三年六郷二十八山 本寺目録	中山分末寺 吉水山万福寺 ^三	太宰管内志

移される前に葉師如來が安置されていたと伝えられる場所である。この方柱石塔婆の横には、延享2年(1745)銘の庚申塔がみられる。

写真25
万福寺近景（東から）



写真26
万福寺本堂



写真27
万福寺観音堂





写真28
万福寺石塔群



写真29
同上



写真30
万福寺歴代住職墓地

写真31
万福寺 1号国東塔



写真32
万福寺 2号国東塔





写真33
万福寺家族墓地



写真34
万福寺家族墓地配石墓
(その1)



写真35
万福寺家族墓地配石墓
(その2)

写真36
万福寺寺族墓地配石墓
(その3)



写真37
薬師如来石塔



写真38
宇大平所在薬師如来石塔



IV 龍下山成仏寺

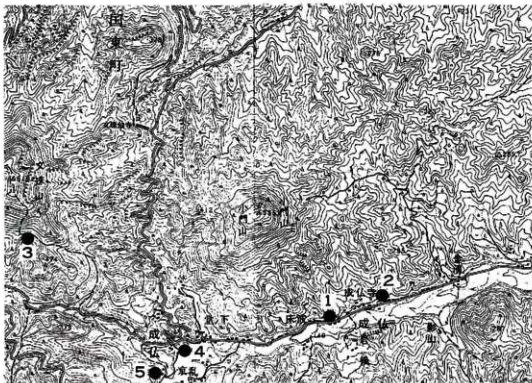
成仏寺は、東国東郡国東町大字成仏に所在する末山本寺の1カ寺であり、龍下山成仏寺と称し、天台宗比叡山延暦寺派に属する。両子山を中心として拡がる放射状の谷のひとつ、田深川の上流約11Kmの南面した丘陵斜面に位置し、背後に巨大な露頭岩を有する。

成仏寺は、六郷山寺院最大の法会である修正鬼会が行われる寺院として著名であり、修正鬼会は東組では岩戸寺と当寺が1年交替で行われるのみである。

本堂・庫裡・山門

現在の本堂は瓦葺入母屋造で、昭和43年の建立。庫裡は瓦葺き切妻で昭和44年の建立であるが、本堂・庫裡は同棟である。『太宰管内志』の「天明年中六郷山寺院名簿」に「寺は入五間平十二間あり本堂庫裡同棟なり」との記載がある。なお、室内には近世の木尊不動明王像・脇侍袴袴羅童子・制多迦童子を安置している。

山門は瓦葺切妻造で、天明2年(1782)の建立である。山門につづく参道脇には天保2年(1831)銘をもつ仁王像、山門手前には安政2年(1855)銘をもつ仁王像がそれぞれ左右に立つ。山門に入って右手にある石灯籠には安政4年(1857)の銘が刻まれている。



第10図 成佛寺周辺遺跡分布図(縮尺1:25,000)

1. 成佛寺
2. 内畑観音堂
3. 清滝観音堂
4. 朝日観音堂跡
5. 芋尾観音堂跡推定地

愛染堂

本堂・庫裡と同様、近年建てられた木造トタン葺の建物である。村内諸仏合併堂とよばれ、明治期の神仏分離の際、村内各地より仏像が持ち込まれたとされている。石造聖観世音菩薩（江戸時代）は本来、朝日観音堂に、木造延命地藏（室町時代）は講社横にかつて存在していた地藏堂にそれぞれ安置されていたものである。木造愛染明王（江戸時代）は小竹誠一氏が京都より持ち帰ったものであるらしい。そのほか木造閻魔王、司録・司命、十王（いずれも近世の作）を安置する。これら諸仏のほかに嘉永6年（1853）銘の入峯札、寛政7年（1795）銘の阿弥陀仏造立修札、寛政9年（1797）銘の阿弥陀堂建立棟札を納める。

阿弥陀堂建立棟札の内容は以下のとおりである。

			大庄屋		當村庄屋
聖主中天天	迦陵頻伽声	寛政九丁巳祀	木浦 新三郎		桜木
(種子) 奉再建阿弥陀堂一字		右意趣者当領主松平駿河守親賢			
		御武運長久殊者氏子繁榮如意満足祈			
			御代官		當村
哀愍衆生者	我等今敬礼	四月吉祥日	後藤 伴右エ門		山之口 弁指

歴代住職墓地

本堂西側より阿弥陀堂にむかう参道を約10m登った所の平坦地西側に18基ほどの墓地が営まれている。六郷満山中興の祖といわれる延宝7年(1679)銘の順慶法印の墓を取り囲むようなかたちで、江戸中期から昭和年代にかけて営まれた歴代住職とその縁者の墓が並ぶ。

なお、墓地東側、参道脇には天明6年（1786）銘をもつ石灯籠が立つ。

阿弥陀堂（奥の院）

本堂西側にある急な石段を約30m登った所に位置する。阿弥陀堂は岩屋を背にした桁行2間、梁行1間、板葺の礼堂と、岩屋内の阿弥陀如来を安置した阿弥陀堂からなる。「太平管内志」「天明年中六郷山寺院名簿」には「阿弥陀堂は寺ノ上にあり入り三間長五間寛日六月十四日 講堂は七月十七日なり」とあり、かつては桁行5間、梁行3間の規模をもっていたようである。愛染堂に残されている棟札には、礼堂は寛政9年（1797）に建てられたことが記されている。また、阿弥陀堂の礎石横に方柱状の石碑があり、それには寛政7年の銘が刻まれている。堂内に安置されている阿弥陀如来の様式も寛政期のものとみてよく、おそらく阿弥陀堂を祀ったのに伴って礼堂が建てられたものであろう。

阿弥陀堂横石塔群

阿弥陀堂西側の岩窟の続きに戦国時代の異形円東塔・宝塔・五輪塔・石殿などが、約20基置かれている。その最高所に石祠がみられ、「文化十一戊辰 正月吉日 當山現住順道」の銘が確認できるが、その祭神は伝えられていない。また、これらの石塔群の前面に塔身・笠部のみ残る宝

宝篋印塔が置かれているが、台座の残欠など同一個体と考えられる石材もみられる。なお、宝篋印塔の形態から14世紀末～15世紀前半に造立されたものと考えられる。

講堂跡

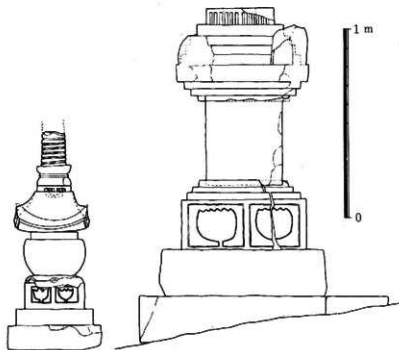
現在、本堂西側に「コウダヤシキ」のシコナをもち、かつて講堂が存在していたとする伝承をもつ石垣により囲まれた東西23m、南北15mの畑地がある。いまでは、礎石等地上に残る遺構は全く確認できないが、『太宰管内志』の「天明年中六郷山寺院名簿」にある「講堂は半町許西にあり」との場所に比定することができよう。しかし、「昔は講堂も寺より東下流にありしと云」の記載に付いては、今回の調査において、その比定地を確認することはできなかった。

なお、講堂跡の南側下方の道路に面した場所に、宝暦8年（1758）銘の法華經一字一石塔がみられる。

虚空藏堂（虚空蔵寺）

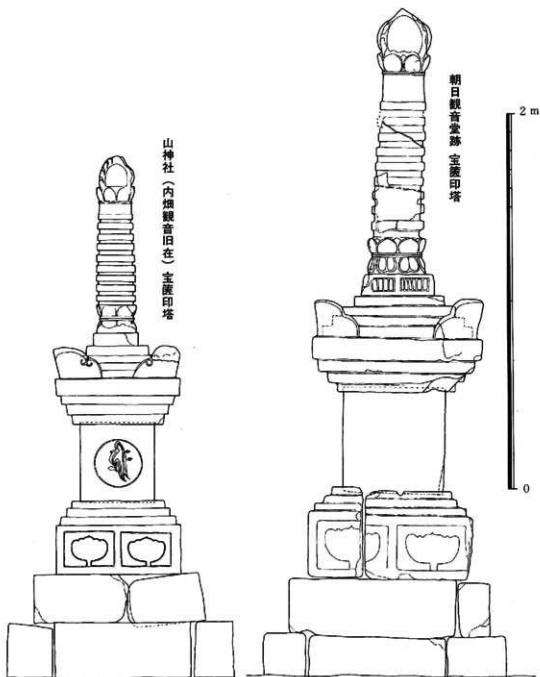
下成仏の徳重太市氏宅南側の谷奥に切り立った岩場があり、その岩陰を利用して、地元で虚空蔵寺と呼ばれる岩屋がみられる。『太宰管内志』の「天明年中六郷山寺院名簿」に、成仏寺の管理する堂舎として「虚空蔵堂」が記載されているのをはじめ、建武4年（1337）の「六郷山本中末寺次第并四至等注文案」には、「末山末寺 一虚空蔵寺 成仏寺之末也」とあり、近世の作とされる「仁安三年六郷二十八山本寺目録」にも「末山分末寺 虚空蔵寺」とみられる。

岩屋は、横約10m、奥行約3mの範囲で岩を掘り窪めており、前面南側には、3段の階段状に岩を成形している。岩屋内には14点の焼け仏が残されており、虚空蔵寺にこれらの仏像が安置さ

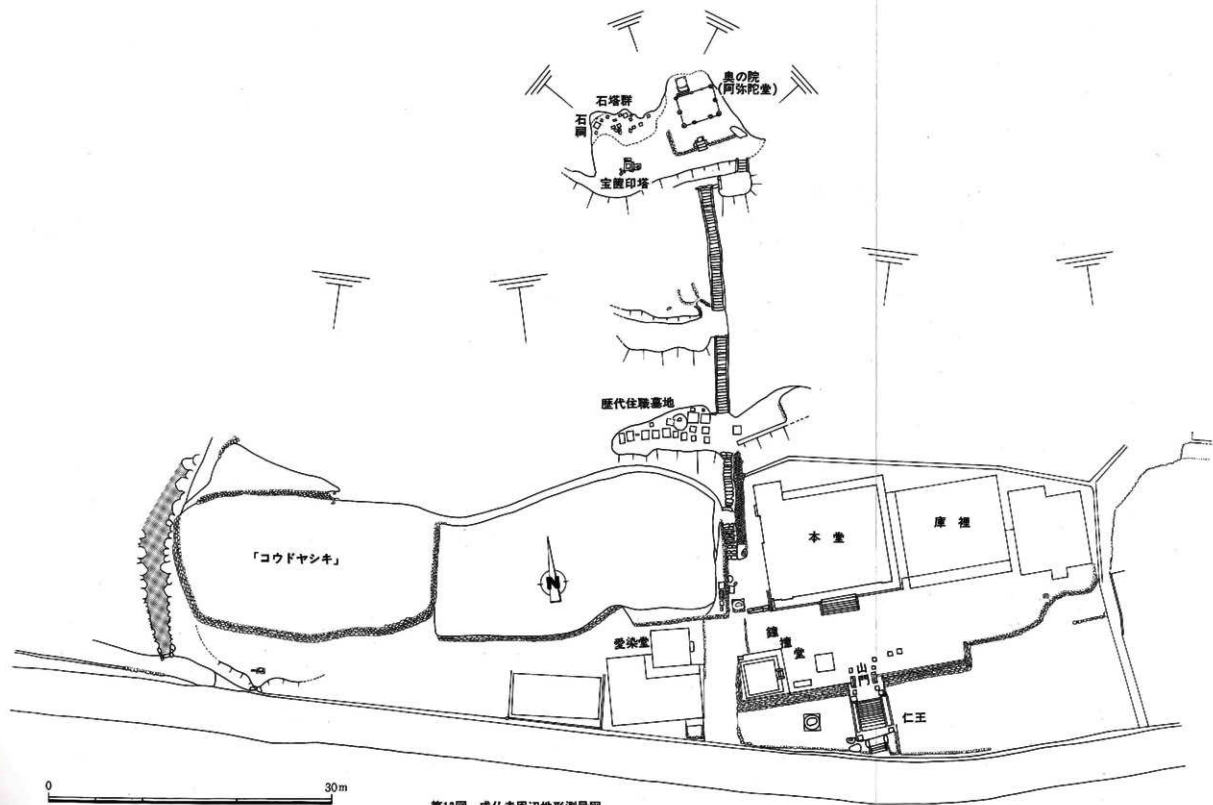


第11図 成仏寺阿弥陀堂周辺石塔実測図

れていたものの、火災に遭い焼失したことがうかがえる。岩屋上部の崖面には、屋根の取り付けのためと思われる約6mの切り込みが横方向にみられ、また、前面の奥行約6m、横約7mの平坦地に礎石状の石があるほか、瓦が散在しているため、小堂が存在していたと推測できる。この平坦面の前面には細い板道が続き、その横に以下の銘文がみられる石碑が倒れている。



第12図 成仏寺周辺宝篋印塔実測図



第13図 成仏寺周辺地形測量図

(右面) 延享四丁卯天 (1747) 夫力 惣氏子

(正面) 奉建立石樓 願主 下成佛 和氣 櫻木平助 同 利左エ衛門 同名 兵左エ衛門

(左面) 二月吉日 石工 熊毛村

板道の下には、より広い平坦地がみられるため、ここに別の堂舎が存在していた可能性が考えられるが、この平坦面下の斜面には石灯籠の石材もみられる。

虚空蔵寺にのぼる谷の途中には、人身大をこえる岩がみられ、この一面に板碑状の彫り込みを設え、銘文を陰刻している石造物がみられるが、地元では、山神社の神職を務め、かつ、成仏の旧庄屋であった櫻木氏の先祖墓であるとする伝承を持つ。

なお、虚空蔵寺の本尊とされた江戸時代の木造虚空蔵菩薩は、明治期、その管理のため下成仏の禅林寺境内の小堂に移され、保管されている。

内畑観音堂

成仏の山神社より東方約100mの成仏字愛染に内畑観音堂がみられる。現在、小さな覆い屋の中に昭和元年銘の石仏が7体安置されているほか、江戸時代の木彫仏の残片2点及び棟札が残されている。この覆い屋の前面には第二次大戦後まで2間四方の小堂がみられたが、現在は廃絶している。この観音堂に隣接する平坦地に夥しい数の五輪塔群が散乱してみられるが、現在、山神社の東側に立てられている14世紀末～15世紀前半のものと考えられる総高約270cmの宝篋印塔及び15世紀後半のものと考えられる総高約230cmの石幢は、この五輪塔群の場所から持ち運ばれたと伝えられている。なお、内畑観音堂の木尊は現在、成仏寺木堂の不動明王東横に安置される江戸時代の木造観音菩薩坐像であると伝えられる。

朝日観音堂跡

県道赤根富来浦線の旧道沿いの成仏字京乱に石垣により造作された約60㎡の平坦地がみられるが、ここが朝日観音堂の旧在地と伝えられている。中央に約3m四方のわずかな高まりがみられるため、この場所に観音堂が存在していた可能性が高い。ここには、室町時代前半の総高約3.5mを測る宝篋印塔をはじめ享保13年(1728)銘の石灯籠や天明2年(1782)の巡拝塔がみられる。

清滝観音堂

『太宰管内志』の「天明年中六郷山寺院名簿」に「一清滝観音堂(中略)文殊仙寺より南ノ山を越て成佛にゆく所右のおくに清滝の観音とてあるそこに勝なる蓋あり観音堂は窟中にあり自然ノ石佛音軀ありと云此観音にも傾主より竹藪米餼燐附あり」と清滝観音堂の記載がみられる。成仏集落から約30分、文殊仙に向かい歩くと、切り立った岩肌の下に3m四方の観音堂がみられる。観音堂の中には向かって右より不動明王・十一面千手観音・多聞天の石仏が並んでおり、その後方に、幅15～50cm、厚さ5～10cm、高さ60～100cmの扁平自然石の立石が14点立てられている。なお、観音堂の棟札から現堂は大正15年に建てられたことがわかる。観音堂前には横約6m、奥行き約3mの石垣で築かれた平坦地があり、その前面にもさらに石垣で築かれた平坦地がみられ、ここには、籠もり堂が建てられている。なお、観音堂横には自然の湧水がみられ、現在でも成仏集落までパイプでこの水を送り、飲料水その他の生活用水として利用している。

写真39
成仏寺遠景（南から）



写真40
成仏寺近景



写真41
成仏寺歴代住職墓地





写真42
成仏寺歴代住職墓地内
順慶法印墓



写真43
成仏寺歴代住職墓地内板碑

写真44
成仏寺奥の院周辺近景



写真45
成仏寺奥の院
(阿弥陀堂)



写真46
成仏寺奥の院横石塔群





写真47
成仏寺奥の院横宝篋印塔



写真48
成仏寺奥の院横国東塔

写真49
成仏寺内畑観音堂



写真50
成仏寺内畑観音堂横
石塔群



写真51
虚空蔵寺跡





写真52
山神社宝篋印塔



写真53
山神社石燈

V 参社山行入寺

行入寺は国東町大字横手字行入に位置する末山本寺の一ヶ寺である。東に延びる丘陵の南面谷部を利用し伽藍を配置し、谷部の狹隘な平野に面している。建武4年(1337)の「六郷山本中末寺次第并四至注文案」の資料を初出とし、現在に至るまで天台宗寺院の命脈を保ち続けているが、県指定有形文化財の木造不動明王坐像が安置されていることで名高い。

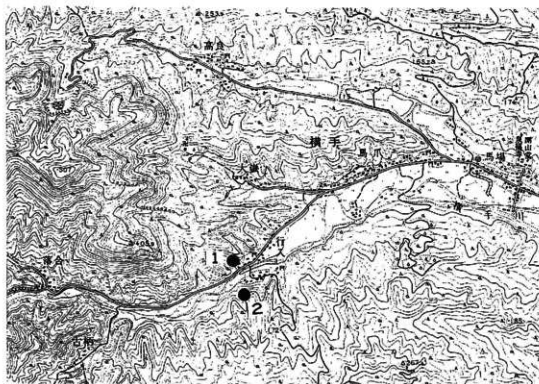
本堂・庫裡

本堂は瓦葺き平屋で、本堂に隣接して西南には庫裡が建つ。本堂内には木造不動明王坐像が安置されているが、これは本来、行人寺西側に聳え立つ仙の岩の西側の高い岩肌に岩穴があり、そこに安置されていたものを昭和8年3月に保管のため行入寺に持ち降りたものである。なお、本堂前には2基を組み合わせた宝篋印塔がみられるが、昭和40年代に他所から移されたと伝えられている。

大師堂跡・妙見宮

現在、庫裡横から西南方向にコンクリートの道が付き、大師堂跡・妙見宮へと続いている。大師堂跡とされる位置には、切石による外護列石および礎石の一部が残るのみであるが、昭和30～40年代までは建物が残されていたと伝えられている。

大師堂跡の横には妙見宮があり、2基の石祠と石造地蔵が置かれている。石祠には銘がみられ、



第14図 行入寺位置図(縮尺1:25,000) 1. 行入寺 2. 法泉院跡

1基には「奉寄進 妙見宮 弘化□□四月吉祥日」、他の1基には「安政四（1857）御祈願所 午九月」とあり、19世紀中葉に造られたものであることがわかる。また、妙見宮の石祠横に置かれている石造地蔵はこの人師堂に安置されていたと伝えられる。

なお、現在、本堂本尊である不動明王の横に木造不動明王が置かれているが、これは、本来、豊泉院に安置されていたものを一時、大師堂に移し、大師堂倒壊後に再び本堂に移したとされている。

不動堂跡

妙見宮の石祠からさらに細道を西に向かうと不動堂の岩屋に続く。不動堂は昭和20年代に倒壊し、現在はその建築材が岩屋内に集積されている。かつては木彫仏が約30体みられたと伝えられるがその所在は不明である。不動堂の前には倒壊した石灯笼が数基みられ、「安政五丙申（1858）三月吉日」、「明治十三〇歳奉寄進」、「奉念仏法者村中」といった銘がみられる。この周辺には戦国時代に属する数基の五輪塔部材・一石五輪塔をはじめとした石塔類が集積されている。不動堂の前には、急な石段が延び、その下方に数基の板碑が集められているが、これらは川を挟み、対岸に散在していたものを移したものと伝えられている。

歴代住職墓地

本堂・庫裡の西側丘陵尾根を利用して一般在家信徒の墓地内に歴代住職墓地を3箇所に分けている。最も下方には大型の板碑型墓石のみが存在し、以下の銘がみられる。

貞享二年乙丑天

貝権大僧都大越家小泉院法盛覚置位

二月廿七日

貞享2年（1685）は歴代住職墓地の中で最も古く位置付けられるため、近世、寺檀制成立後、中興の祖に位置付けられる人物であろう。その他の歴代住職は無縫塔を主とし、2段にわたり配されている。

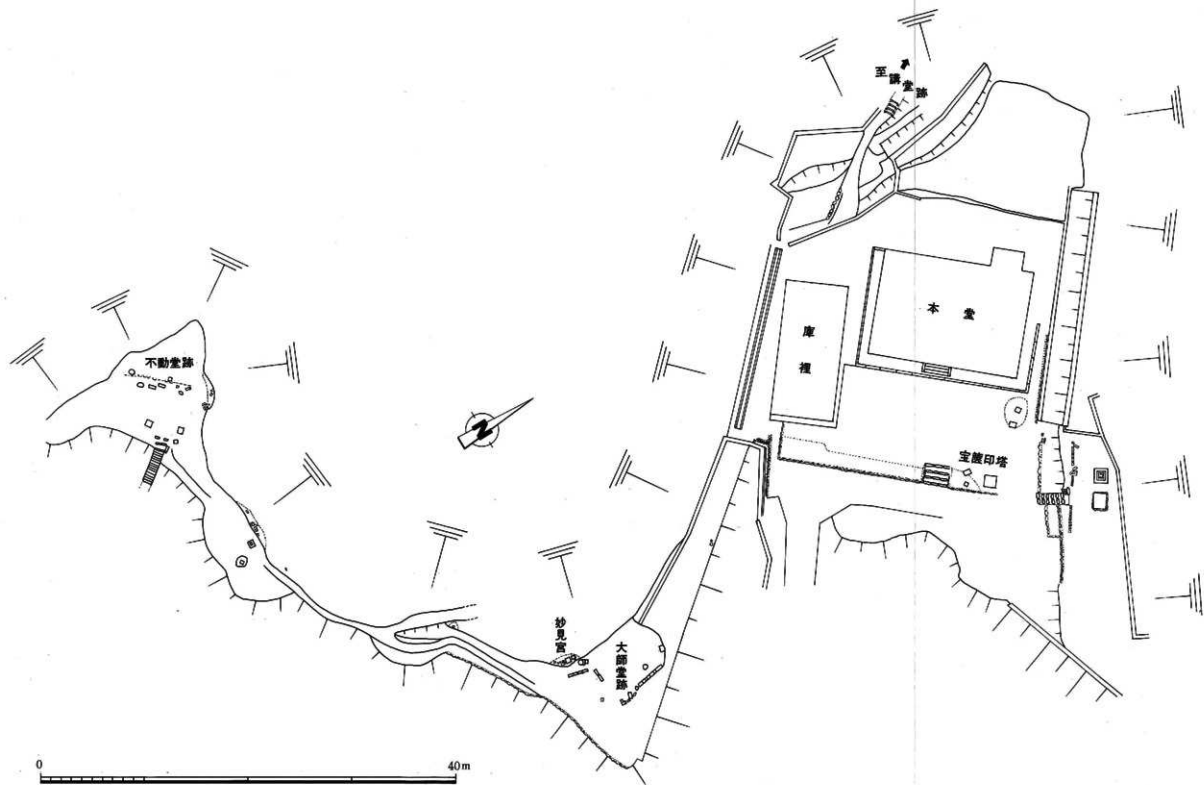
講堂跡

本堂裏山には谷に沿い、北に山道が延びるが、この山道沿いに杉林の平坦地が幾枚も造作され、現本堂から約170m後方に位置する最も奥の平坦面に講堂が存在していたと伝えられている。横約15m、奥行き約10mの広さを持つ平坦地に茅葺き五間四方の講堂が建てられていたが、昭和初期には倒壊しはじめていたため、昭和8年3月、講堂本尊である木造薬師如来を本堂に持ち降り、本尊である木造不動明王の横に安置したと伝えられている。

なお、この講堂では明治末～大正初期まで、修正鬼会が行われ、また、大正初期までは講堂前にて護摩焚きが行われていたと伝えられている。

法泉院（豊泉院）跡

行入寺と谷を挟み、南側の丘陵斜面に法泉院跡と伝えられる場所がみられる。現在は地区の墓地が拡がっているが、墓地の上段には、奥行5m、横9mの平坦地が設けられ、横5.8m、奥行1.8m、高さ0.1～0.3mの自然石を集積した配石墓がみられる。この前には3基の位牌形墓石がみ



第15图 行入寺周边地形测量图

られ、うち1基には安永7年(1778)銘がみられるが、これらは後世ここに移された可能性が高い。また、配石墓の前面の下段には、戦国時代の一石五輪塔・五輪塔の残欠が集積されているほか、板碑1基と3基の近世墓が見られる。板碑は横46cm、地上面の高さ93cm、碑面幅14cmを測り、3基の近世墓は、以下の銘文をもつ。

1号墓碑(無縫塔)

享保十九甲寅天
大法師文英坊大徳
正月二十六日

2号墓碑(板碑形墓碑)

享保四巳亥天
卍 當寺中興権大僧都大越家法師義珍靈位
四月十五日

3号墓碑(板碑形墓碑)

享保十己天
卍 大法師文了坊位
十二月十二日

これらはいずれも僧職にある人物の墓碑であり、法泉院との関連で捉えられよう。地元の伝承によれば、法泉院には、明治20年代まで住職がいたものと伝えられている。

第5表 参社山行入寺関係文献一覧

年 号	出 典	記 載 事 項	備 考
建武4年 (1337)	六鷲山本中末寺次第并四至注文	一行入寺 關院院主 院主 院主 委院主所持諱文仁明白也 (關) (虚空)	永弘文書
永享12年 (1441)	深見幸盛等連署文書執出日記	「執出日記」成仏寺 こくう蔵寺 行入 寺の事ニ付て 御文書をゑらひ候 仍此 かわこの内より國東郡寺社をしるし候帳 二通 同來浦村帳 以上四通取出候也 但此四通内案文之帳一通なり 永享十二年正月十九日 幸盛 (花押) 幸綱 (花押)	入江文書
大明年間 (1781~1789)	大明年中大鷲山寺院名簿	國崎郡行入村参社山行入寺并築嶺山門末 一堂二 餘地高一石一斗などあり行入 寺は村ノ中にあり前に谷川あり道筋もあ り流より半町許上 巖 に寺あり東南ノ間 に向へり 巖 寺より一町許西南ノ道ノ 上に不動堂あり 巖 寺は入三間横六間許 なり昔ノ寺地は今ノ寺より東北ノ方近き に在て諸堂の跡いちじるし	太宰管内志
?	六鷲山定額院主日録	鎌河山行入寺 院主成就院行徒六ヶ所 ^三	太宰管内志
仁安三年 (1168) ※但し後世の作	仁安三年六鷲二十八山本寺目録	流通分本山十箇寺 参社山行入寺 ^三	太宰管内志

写真54
行入寺・千の岩遠景



写真55
行入寺近景



写真56
千の岩遠景





写真57
行入寺大師堂跡



写真58
行入寺妙見宮



写真59
行入寺不動堂跡
(その1)

写真60
行入寺不動堂跡
(その2)



写真61
行入寺歴代住職墓地
(その1)



写真62
行入寺歴代住職墓地
(その2)





写真63
行入寺法泉院跡集石遺構
(その1)



写真64
行入寺法泉院跡集石遺構
(その2)

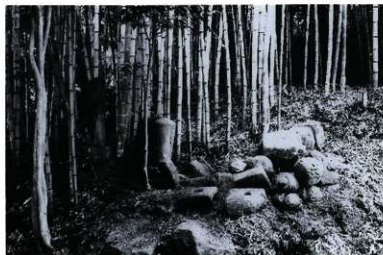


写真65
行入寺法泉院跡石塔群

第4章 まとめ

吉水山靈龜寺

靈龜寺の寺基を受け継ぐとされる福昌寺の『寺院明細牒』には、靈龜2年(716)に良庵幻覚和尚により法相宗の寺として創建されて以降、暦応元年(1338)、臨濟宗に、また、至徳元年(1384)に曹洞宗に転宗したとされている。靈龜寺に関する文献では、安貞2年(1228)の「六郷山諸動行并諸堂役祭等目錄高」以降、建武4年(1337)の「六郷山本中末寺次第并四至等注文案」まで六郷山寺院として現れる。「六郷山本中末寺次第并四至等注文案」にみられる他の六郷山寺院と同様に、この段階までに寺領を押領されており、暦応元年(1338)、臨濟宗に転宗していることから南北朝初期にはすでに天台宗寺院としての命脈を絶たれていたことがわかる。

一方、靈龜寺の跡に建つ吉水神社は、かつて「三王権現」と呼ばれ、長元7年(1034)創建の由緒をもつ。山王権現は天台宗の護法神であり、由緒に基づけば11世紀前半には天台宗寺院としての靈龜寺が成立していたことになる。

その遺構を観察した場合、最上部に位置する吉水神社に続く長い参道の両側に平坦地が何段も続き、最上部の広い平坦地に靈龜寺の建物が存在していたと伝えられるが、講堂あるいは院主坊の建物が想定できよう。また、参道入り口付近の字實地には「ニオウドウ」あるいは「ニオウモン」のシコナが残り、明治時代の『寺院明細牒書載無之仏堂』にはここに「二王」が存在しているように記載されている。これらのことから長い参道の最上部に「三王権現」を設け、参道の両側の平坦地に建物を配するというように、豊後高田市長安寺をはじめとした典型的な六郷山寺院の伽藍配置を靈龜寺ももつことがわかる。

遺物については、五輪塔をはじめとした中世の石造物が東国東郡安岐町からすべて持ち込まれており、天台宗時代の靈龜寺の石造物は認められない。また、坊跡の存在が伝えられているが、今回の調査においては確認することはできなかった。

稲積山慈恩寺

現在、稲積山慈恩寺は本山分末寺の六郷山寺院であり、近世初頭に当地の有力者である真木城主、松平主殿の弟の古庄正勝が臨濟宗に改宗し、再興したと伝えられる。境内地および墓地の石造物では戦国期末期～近世初頭のものが最も古いことから、移動させられたものでないとすれば、この頃からの足跡が辿れる。また、境内地には6基の自然石立石からなる六所権現が存在し、六郷山寺院としての名残も認められよう。

建武4年(1337)の「六郷山本中末寺次第并四至等注文案」に見られるように中世の六郷山寺院は一定の範囲を寺のエリアとしてもち、その範囲内に関連堂舎を営んでいることがわかる。安貞2年(1228)の「六郷山祈禱卷數目錄」や「六郷山諸動行并諸堂役祭等目錄」にみられる「不動石屋」は、熊野磨崖仏かあるいは鍋山磨崖仏をさすものか、明確にはできない。しかし、「六郷山本中末寺次第并四至等注文案」にみられる「稲積岩屋」は鍋山磨崖仏と呼ばれる稲積不動堂をさすものとして間違いないと思える。

一方、慈恩寺の位置する豊後高田市平野字観音堂は、近世期には「観音堂邑」と呼ばれ、現在、慈恩寺境内にある観音堂にちなんだ地名であることが分かる。この観音堂は現位置からおよそ100m東南方向の位置から移されたものと伝えられているが、堂内にみられる平安後期の木造天部形立像・木造菩薩形立像から中世期、観音堂およびその関連堂舎の存在が想定できよう。元禄2年(1689)の観音堂村の景観を描いた『豊後国田染組観音堂村絵図』には、もうすでに観音堂が慈恩寺境内に描かれているため、それ以前に移設されたことがわかるが、中世期の六郷山寺院の様子を伝えるとされる「六郷山定額院主目録」には「稻積山観世音寺院主傳乗寺ノ徒」とあり、観音堂の存在を裏付けるものと考えられる。

このように慈恩寺には、中世期の六郷山の要素を採り入れているものの、その寺院が中世、六郷山寺院の故地であるとは考えられない。ただ、慈恩寺からは上野が一望のもとに見下ろせるため、真木城主、松平主殿の弟の古庄正勝が慈恩寺を臨濟宗に改宗し、再興したと伝えられるように、当地が田染地区の有力者である古庄氏との関連をもつ場所であると推測できよう。

万福寺

万福寺は、近世のものとしてされる「仁安三年六郷二十八山本寺目録」や『太宰管内志』の「六郷山定額院主目録」にみられる中山分末寺として「吉水山万福寺」の以前は、管見にふれるかぎりでは文献上にはあらわれない。六郷山寺院としては谷部中央に川に面して位置するなど、立地からみて六郷山寺院であったとしては見地山東光寺以外はほとんど類例が見られない特徴をもつ。また、六所権現・三所権現などを伴うとする伝承もみられない。

万福寺が現位置に立地する背景として、往時の主要幹線道路が万福寺前面で交差していたことがあげられよう。現在は、万福寺後方に車道が走るが、杵築から万福寺前を通り、西に向かい鬼籠に抜ける主要幹線道路があり、近世、杵築藩主の参勤交代にはこの道を利用していたとされる。この道は「トノサミチ」と呼ばれ、万福寺が参勤交代の際、宿泊所とされたとも伝えられている。万福寺前には「六十六部中石橋再建立供養 天保十三年壬寅歲(1842) 三月吉祥日」の銘をもつ方柱石塔婆が残り、近世の石橋が存在していたことも確認できる。万福寺前からこの石橋を渡り、東方へ延びる道がみられ、前方の丘陵を越え、新涯の万徳寺北側の道に通じ、このほかにも万福寺前から櫛海川沿いを海岸部まで延びる道が見られたと伝えられるように、万福寺の位置は交通の要衝であったことがわかり、これが万福寺成立の大きな要因であったことは想像するに難くない。

応永8年(1401)に南陽融薫禅師により曹洞宗に改宗されるまでの天台宗時代の遺構・遺物は、今回の調査においては確認できなかった。それでは文献その他では、どのような様相を呈するのであろうか。建武4年(1337)の「六郷山本中末寺次第并四至等注文案」には「中山末寺 一葉師堂 料田畠四至以下 院主證文明白也」とあり、「仁安三年六郷二十八山本寺目録」にみられる中山分末寺の寺院リストと比較すれば、「六郷山本中末寺次第并四至等注文案」の「葉師堂」は、万福寺の前身である施設をさす可能性が高い。また、中世の六郷山を著したとされる『太宰管内志』の「六郷山定額院主目録」には、「補陀落山千燈寺 嶺松院ノ徒呂三十八箇所 権現 観音

大講堂 高野 五岩屋 千燈下拂房也 来死海薬師 伊美ノ平等寺 伊美ノ萬徳寺 神宮寺也」
とあり、万福寺の前身と考えられる「来死海薬師(クシマヤクシ)」が千燈寺の末寺であったことが推測できる。これらの資料は曹洞宗改宗前の万福寺が、本来、木造薬師如来坐像を安置する小堂であったことをうかがわせ、現在に残る地名調査においても、万福寺の櫛海川を挟み東側を「堂の前」、万福寺南側の小路を挟み南を「堂の上」とする小字が残る。

以上のことから、万福寺は上限の時代は明言できないが(少なくとも木造薬師如来坐像が造顕された平安時代後期以降であると考えられる)、中世前半に櫛海地区の谷部において最大の交通の要衝であった場所に小堂を営み、象徴的に木造薬師如来坐像を信仰する仏教施設であったことが想定できる。

龍下山成仏寺

成仏寺は建武4年(1337)の「六郷山本中末寺次第并四至等注文案」にはじめて文献に現れ、その四至について、北の小門山以外はその四至を明らかにし得なかった。しかし、『太宰管内志』の「天明年中六郷山寺院名簿」にみられる諸堂舎の遺地を、報告してきたように今回の調査でほとんど確認できた。

成仏寺の伽藍に関しては、本来、奥の院(阿弥陀堂)の岩屋が存在していたことが推測でき、現在の奥の院(阿弥陀堂)が18世紀末のものであるが、その横に残る宝篋印塔が南北朝末～室町初期であることから、この頃にはすでに岩屋が存在していたものと考えられる。講堂跡については、「天明年中六郷山寺院名簿」にみられるように現本堂の西方で確認し、18世紀後半には存在したことが分かるが、その上限は今後の埋蔵文化財調査に委ねざるを得ない。また、それ以前の講堂が本堂より東側下流に存在していたと「天明年中六郷山寺院名簿」に記載されているが、今回の調査では確認できなかった。

参社山行入寺

行入寺は、その谷奥に延びる山道の最奥部に講堂がかって存在したとされ、ここに伽藍のはじまりを考えるべきであろう。しかしその時期は明らかでなく、今後の埋蔵文化財調査に委ねざるを得ない。現在の本堂・庫裏はかって行入寺の住居空間であると考えられ、不動堂跡から大師堂跡を経て行入寺へ向かい、また、行入寺から墓地の下を通り下流側に向かう細い古道は主要な道路であったと考えられる。

行入寺とは谷を挟み、反対の丘陵斜面には法泉院跡が残り、配石墓および石塔や墓碑群が認められた。しかし、行入寺周辺以外では、法泉院跡周辺以外には関連堂舎および石造物群は確認できなかった。現在、行入寺の上流域が行入ダムの建設により谷部のほとんどが水没しており、その歴史環境は今では確認しようがなく、ダム建設における埋蔵文化財調査はもちろんのこと歴史環境をはじめ、民俗調査の必要性を痛感させられた。

報告書抄録

ふりがな	ろくごうさんじいんいこうかくにんちょうさほうこくしょ							
書名	六郷山寺院遺構確認調査報告書							
副書名	吉水山靈龜寺・稲積山慈恩寺・万福寺・龍下山成仏寺・参社山行入寺							
巻次	VI							
シリーズ名	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書							
シリーズ番号	第20集							
編著者名	原田昭一・堀 優子							
編集機関	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館							
所在地	大分県宇佐市大字高森字京塚							
発行年月日	1998年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
吉水山靈龜寺 (万福山吉水寺)	大分県 宇佐市 大字両戒	107	-	33° 31'	131° 25'	970401 ~ 980331		学術調査
稲積山慈恩寺	大分県 豊後高田市 大字平野	102	-	33° 29'	131° 31'	970401 ~ 980331		学術調査
万福寺	大分県 東国東郡国見町 大字櫛海	215	-	33° 39'	131° 34'	970401 ~ 980331		学術調査
龍下山成仏寺	大分県 東国東郡国東町 大字成仏	217	005	33° 35'	131° 37'	970401 ~ 980331		学術調査
参社山行入寺	大分県 東国東郡国東町 大字横手	217	028	33° 34'	131° 39'	970401 ~ 980331		学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
吉水山靈龜寺	寺院	中世・近代	寺院伽藍					
稲積山慈恩寺	寺院	中世・近代	寺院伽藍					
万福寺	寺院	中世・近代	寺院伽藍					
龍下山成仏寺	寺院	中世・近代	寺院伽藍					
参社山行入寺	寺院	中世・近代	寺院伽藍					

大分県立宇佐風土記の丘
歴史民俗資料館報告書第20集

六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅵ

平成10年3月31日

発行 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館

〒872-0101 大分県宇佐市大字高森字京塚

印刷 松原印刷

宇佐市大字長洲548の1

